

## 新しい学校プログラムの創造

— 変革の時代にあつて —

東京都豊島区立高田小学校教頭 中澤 米子

冒頭より、やや申し訳なく失礼な話であるが他人の悪口を一つ。私の親しき友人の事である。友人は、私の思うところ、また感ずるところ、大変優秀な人である。時代状況への鋭い洞察力、そこから生まれる悪意のない物事への的確な批評。また、日常生活において、常に冷静な判断ができ適切な処置ができる。友人はそういった能力を存分に備えている人である。さらに、人としての良心も優れていて、決して周りの人を不愉快にしない。そんなところが快くて、その人とはずっと気の合う友人でいる。

しかし、残念なことに、友人には何か一つ物足りなさを感じてきた。それは決定的な場面（人生の分かれ道！？）になると、いつも、何故か友人は、古い慣習のドグマに陥ち込んで、決まりきった思考パターンを繰り返すのである。日頃感心させられているあのインテリジェンス《知識》とウィズダム《英知》はどうしたものかと苛立つのであるが、最近ようやくその謎がとけた。つまり、こうである。

友人をコンピュータの世界で比喩的に分析してみよう。そうすると、友人の人間像はさしずめ以下ようになる。友人は豊富なソフトを知っており、その活用法にもたけている。物事を処理するのに最も適切なソフトを判断できるし、時代に合わなくなったソフトは、機を逸せず交換する能力もある。ソフトを動かすのに必要とあらばメモリーの拡充もできる。（ここが肝心、たいていの人はこれができない。）従って、常に、程よい程度の斬新なソフト（能力）と、それを駆使できるメモリー（技能の向上）を持ち合わせた人ということになる。けれども決して、友人自身ソフト

を動かすプログラムを蓄いたり、プログラムの入れ替えをしないのである。すなわち、友人は、自分で問題解決のプログラムを作るプログラマーではないのだ。

さて、『新しい学力』を育てることを教育の指針とする、新学習指導要領が改訂されて、早くも一年が過ぎようとしている。その具体策として社会の変化に主体的に対応する能力だの、個性を伸ばすだの、そのためには、意欲・関心、態度を喚起することが先決だのが提案されてきた。生活科の誕生もその潮流の中のできごとである。大方の学校でも、通知表を改訂するなどして、その趣旨を生かすべくスタートを切ったといつてよい。

ところで、この『新しい学力』とは、どのような学力なのであろうか。今、求められているこの『学力』こそ、自力で問題解決のプログラムを創る力である。いうなれば、自分自身の生きがいを生涯に亘って奮き続けられる、独立したプログラマーの育成である。

一人一人の卓越したプログラマーを育成するために、当然ながら、これまで、官僚主導型で決めてきた『学校』のプログラムも大きく修正しなくてはならない。このことを、それぞれの学校がどれだけ深く認識しているかどうか。実は今、私達教育現場は正念場に立っているのである。大げさでなく、これからの社会が存続するかどうか、ひとえにこのことにかかっている。

最後に、誤解のないよう申し添えておけば、友人と比して、私が優秀なプログラマーであるかと云えば決してそうではない。ずっと以前にインプットされた固定プログラムの桎梏の中で、私自身ルーティーンを繰り返している。

# 《学期研修会報告》

## 「新学習指導要領における評価について」

【期日】 11月29日(日)

【会場】 上智大学

今回は、「新学習指導要領における評価」をテーマとして、午前二つの生活科の実践発表、午後には高浦先生の講演とシンポジウムを行い、50名ほどの参加者で熱心に討議された。

【午前】

### 実践研究発表「生活科の授業と評価」

新潟県大手町小学校 笠原 正先生

愛知県御津南部小学校 山本昌史先生

#### 1. 発表内容の概要

〔○印は、大手町小学校の実践〕  
〔●印は、御津南部小学校の実践〕

#### ①生活科の評価の捉え方

○早くから生活科における評価は「子どもの学習の成立を確かめる評価」と「教師の指導を厳しく問い直す評価」の二側面があると考えてきた。そして笠原先生は特に、子供を「認め・励まし・高める」評価(=子供に返す評価)の重要性を指摘された。

●生活科の評価を「子供の成長・発達に関わる評価」と「教師の指導に関わる評価」という二側面でもとらえている。そして山本先生は、「授業が成り立ってこそその評価」という視点の見直しを強調された。

#### ②評価活動のアウトライン

○まず、ある単元を構想する際、同時にその単元における評価の計画まで作成する。そして「事中評価→支援」を毎時間繰り返し、単元の終わりの評価へとつなげていく。

●授業実践に先だって予め単元における評価活動を作成するが、生活科の活動内容の中に、生活科の時間だけでなく子供が毎日の学校生活の中で関われるものを用意しておき、随時評価活動を行うことを考慮している。

#### ③評価の観点

○評価の観点は指導要録の3つの観点を、単元の目標や活動に照らして小單元ごとの評価基準を設定している。

●評価の観点として「興味・関心」「追求力」

「表現力」「自分自身への気づき」を設定している。

#### ④評価の方法

両校とも、目標達成に関しては行動観察・作品評価・自己評価・他者評価などを用いており、特に、観察(子供の見取り)に力点を置く。

また、大手町小では、場合によっては「目標自由評価」も取り入れているとのことである。

#### ⑤指導と評価の一体化

これら一連の活動によって明らかにされた子供の学習や教師の指導に関する情報は、「事中」においては子供への支援に生かされ、「事後」においては、単元の活動分析と単元構想の見直し(=次の単元へ)や、通知表、指導要録の資料などに用いられる。これは両校とも同様である。

#### 2. 質疑応答、研究協議における話題

- ・新しい教科である生活科の実践に関する配慮、(対保護者)および工夫について
- ・生活科における「授業・学習の成立」を図る上での工夫。(単元・授業の構成上の工夫、評価活動によって生じる計画の修正の実際など)
- ・生活科によってもたらされた子供の変容。

#### 3. 参加者の感想

- ・両校の、生活科に関する膨大な実践の蓄積に裏付けされた研究内容に圧倒されてしまった。
- ・発表者のお二人の先生の教育実践に対するエネルギーかつ真剣な姿が伝わってきて、感銘を受けた。
- ・質疑応答、研究協議における討議内容も、的を得たものであったので、参考になった。

(池田 伊三郎)

【午後】

### 講演 「生活科の授業と評価」

国立教育研究所 室長 高浦 勝義先生

高浦先生には、生活科を中心に評価の問題を『目的』『観点』『基準』『方法』『対象』(いずれも“評価の”が付く)といった点から講義していただいた。概要は次のとおりである。

目的としては、「新指導要領で言われる新学力

の育成、一人一人を伸ばすことから一人一人の可能性を積極的に評価する(目的1)」「授業をこまめに評価し、その事を指導に生かす。つまり、指導と評価の表裏一体化を目指す(目的2)」があげられる。

生活科の三つの観点は、自己教育力から出てきた。ならば学ぶときには、関心・意欲・態度が必要で、思考・表現・判断力がなければ学ぶことはできず、そのプロセスや結果として社会や自然・自分についての気付きがなければならない。つまり、ただ単に観点の上下が逆になっただけでなく、どの単元でも三つの観点を指導案に書いたり、イメージしようというのが特色である。

評価の基準として、次の3点があげられる。

①活動や体験の広がり、深まり。

②一人一人に即した評価。

③実践的態度……生活の中での成果も見ていく。

評価の方法は、ペーパーテスト中心であった評価方法から、教師の観察・作品(ノート、カード、製作物など)・自己評価や相互評価カード、面接(児童、親)・授業記録などいろいろな方法を重視していくようになってきた。

「評価というのは、自分の問題解決をするためにいろいろな事物事象を値ぶみすること」で、教師にとっての教育評価の直接的な目的は、自分の授業である。子供の評価は二次的なものであると考えるのが妥当である。評価とは、上記の目的2が目的であり、それを裏付けるために目的1が必要である。このように生活科には今までの評価観にはない、新しい面がある。

なお、詳しくは、高浦先生の著書である『生活科における評価の考え方・進め方』(黎明書房)をお読みいただければと思う。

(荻久保 公秋)

シンポジウム「新しい学力観とその評価」

《パネリスト》

上智大学 教授 加藤 幸次先生

国立教育研究所 室長 高浦 勝義先生

名古屋大学 助教授 浅沼 茂先生

豊島区立高田小学校 教頭 中澤 米子先生

{☆印は、パネリスト (敬称略)}

{☆印は、参加者}

☆(加藤) …新しい学力観の評価は関心、意欲、思考力、判断力、表現力で、これらを切り離さないで問題解決の過程でうまく評価していく必要がある。特に課題作りには意欲が、検証の過程で思考力・判断力、表現力は最後のまとめで一番よく現われる。そこで問題解決のプロセスの中で一貫連動して評価していく構造を考えていかなければならない。また、自己評価、他者評価という要素も必要になってくる。さらに様々な角度から評価するというのも大切なことである。

☆(浅沼) …例えば生活科の評価を考えると、目標にとらわれない評価が大切。そして、子供がどう変わったか評価していかなければならない。また、教材が追求するのに値するか、そして、その教材の取り上げ方とか斬新さでの視点での評価が必要になる。さらに、授業の善し悪しは自分の持っている判断力で評価していかなければならない。

☆(中澤) …通信簿に意欲・興味・関心・態度を設けたが、それをどう評価してどういうふうにつけるかが最大の問題点である。通信簿は変わったが授業は変わったのか、教育課程がうまくいくかどうか、組織や校務分掌を変える作業をしたかということを考えなければならぬ。評価の楽しくなるような授業の創造、意欲や関心が見えてくるような授業を創造する。そして授業を構造化していく。

☆ 子供を評価することとカリキュラムを評価するということの接点はどう考えているか。

☆ 材料、ねたについてのセンスを、すぐれた先生は持っている。

☆ 教材設定の中に評価があるといったが、日常的でない授業は指示語が多い。カリキュラムが子供の実態にあっているかどうかは子供の姿を見なければ吟味できないのではないか。

☆ 子供に教師が何を期待するか、先生自身の体験や知識で教材を持ってくると思う。

☆ 教師が教材・題材を選ぶ力をつけなければならない。そして、それを授業として構造化していく力量をつけなければならない。自分で作った教材・題材であれば必ず評価基準が出てくる。

そして、意欲、思考力、判断力はトータルに出てくる。その時トータルで見ていく授業観、教科観を鍛えなければならない。意欲、思考力、判断力がすべて出てくるような授業は、子供が自ら自学できる出来る場があり、課題に対して自分なりの心の旅が出来る授業であると思う。

(岩田 泰治)

### 研究発表会から

「意欲的に取り組み

追究しつづける子の姿を目指して」

台東区立根岸小学校 笠原 妙子先生

本校では平成3・4年度、文部省小学校教育課程研究指定校として「意欲的に取り組み追究しつづける子の姿を目指して—理科・生活科の授業を通して」をテーマに取り組んできたが、昨年11月20日(金)、この時期にしては珍しいほどの記録的大雨の中、全国から多数の先生方を迎え、その成果を公開発表した。

当日は研究発表を間にはさみ、午前と午後の2回公開授業を行った。授業では多様な学習形態・協力教授など個に応じた指導法、直接体験を重視した問題解決学習、地域素材や人材の積極的活用などを有効に取り入れ、新しい学力観にたった人間性豊かで、自ら考え判断し実践する子供の育成を目指した授業のあり方が提案された。

また研究発表では、テーマに迫るべく三つの柱として、①個に応じた指導法の工夫②生きた学習環境の工夫③個を生かして育てる評価の工夫を指導計画部、環境部、評価部より発表した。

そして、最後にシンポジウム「新しい教育課程に望む」では、登壇者として奥井智久宇都宮大学教授、加藤幸次上智大学教授、角屋重樹文部省教科調査官を迎え、白熱した議論が展開された。

子供たちが自己目標をどう成立させていくのか、そのために教師は何を準備し、どう手助けしたらよいか——登壇者の「授業のあり方をもう一度見直してみませんか。」「今、問われている学力

観とは？」といった熱い鋭い問いかけは、参加者のだれをも教育の原点に立ち戻らせ、改めて授業改善の必要性を考えさせられるひとときだった。

### 関西個性化教育研究会を発足して

「関西にももっと個性化教育を」と1992.12.12神戸大学教授鈴木先生・兵庫県但東町立会橋小学校校長中井先生・同小学校松島先生を中心に、神戸大学・滝川文化交流記念館に於いて、関西個性化教育研究会・発足会を行いました。

当日は、関西を中心に約150名の参加者がありました。連盟事務局からも佐久間・河合の両氏、また千葉から加藤久美子氏がかけつけてくれました。加藤先生はじめ、上記の方々には、不慣れな私たちが右往左往しているところを手際よく手助けしていただきました。本当にありがたいことでした。

これで、関西地域にも個性化教育の足掛かりができたと言えます。

現在のところ、関西地方は「ドーナツの穴」のように個性化教育の実践がほとんど見られない地域です。

そんな関西でも確実にハード面の校舎は増え、個々の学校での実践も芽生えています。後はソフト面での蓄積を積み、点々をつなぎ線にし、さらに網にしていくばかりです。幸いに、先達である東海・九州の教育研究会・全国個性化教育研究連盟の実践が参考になります。

関西地方に活動の波を広げ、東と西に切れていた個性化教育をつなぐ働きを我々の会は担いたいと思っています。これから先、私どもの活動が関西の個性化教育に与える影響を思うと、身の引き締まる思いがいたします。

関西地方の会員に限らず、全国個性化教育研究連盟の方々のご協力をぜひともお願いしたいと思っています。よろしくお願いいたします。

(関西個性化教育研究会事務局 谷口 育史)

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒115 東京都北区赤羽南1-16-2-504

☎ 03-3903-4780

庶務部長 佐久間 茂和

全国個性化教育研究連盟会報 第24号

平成5年2月27日発行

編集責任者 事務局長 高浦 勝 録

編集 広報部 五十子 晴美